

寛先生との思い出

本 田 明 日 香

寛敏生先生に初めてお会いしたのは、大学院入試の面接の時であった。先生は入学後に「イジワルな質問しても返してくるし、挫けなさそうなのでとることにしたんだよ」とニヒルな笑みを浮かべながら、面接の時の様子を教えて下さった。

先生には修士の二年間、「家庭教師」状態で御指導いただいた。ゼミ生は私一人だったのである。今思えばなんとも贅沢で貴重な時間であったが、当時は恐怖と緊張以外のなにものでもなかった。前日は決まって徹夜で準備をしてゼミに臨んだが、いくら準備しても足りなかった。報告する時には緊張で声が震えるほどである。報告が終わると必ず先生に「で、なにが言いたいの？」と質問され、返答に窮するのはいつものことで、たまになんとか答えられたとしても「ふーん。そうかな？本当にそれでいいの？」と言葉少なに、けれども鋭く攻められた。自称「性格が悪い」先生が、緊張し動揺している私を楽しそうに見ていた様子や、拙い私の報告にメモを取りながら、うん、

うん、と肯き聞いて下さっていた姿は今でも忘れずに憶えている。

ゼミが終った後も、学内の喫茶店でお茶を御一緒にしながら色々な話をした。私が悩んでいる時は「カウンセリಂಗ」^グと称して、相談に乗って下さった。なかでも修士一年の夏休み明けのお茶会は忘れられない。当時私は大学院を辞めようかと悩んでいた。そのことを先生にうち明けたが、私の話は、つい堂々巡りとなってしまう。それでも先生は、いつものコーヒーを飲みながら一時間以上も静かに黙って聞いて下さった。そして話が終わると最後に一言「じゃ、次のゼミは来週でいい？」とおっしゃった。その一言に私はとても救われた。気がつくや胸の痞えは消えていた。先生がすべて吐き出させてくれたのだ。修論提出を目前に控え行き詰まってしまった時も、お茶をしながら話を聞いて励まして下さった。先生との一対一のゼミと、このお茶会がなかったら、そして何より先生がいらっしゃらなかつたら、修士論文を書き上げることができなかつただろう。

先生が亡くなられたあと、奥様が遺品の中にあつた二年間分のゼミ報告レジュメをファイルしたものをお譲り下さった。レジュメにはたくさんさんのメモがあつた。報告レジュメだけではなく、修士論文にも赤ペンで数々の指摘が書き込まれていた。先生は一見クールでニヒルな印象とは裏腹に、生来怠け者の私を暖かく見守り、導いて下さった。これらの書き込みは今でも私の支えである。

最後に、先生が学内誌『モノド』十八号に書かれたエッセイに「素敵な大学生」というものがある。「素敵な大学生」とは「教養」があり「中途半端はやらす」に「教師を啓蒙させる」ものらしい。読めば読むほど私は「素敵な大学生」とは正反對なような気がしてならない。これからは先生の教えを忘れずに「素敵な大学生」ならぬ「素敵な大学院生」となれるよう頑張ることで、寛先生との二年間に報いたいと思つている。